

演劇博覧会「カラフル3」レポート

NPO 法人 FPAP 古賀裕奈

■「カラフル 3」(<http://colorful3.jp/>) の概要

「カラフル」は、演劇のショーケースイベントとして名古屋の演劇人によって企画された。

2003 年 9 月に第 1 回となる「カラフル」が開催、続いて 2007 年 5 月に「カラフル 2」そして、2009 年 5 月、「カラフル 3」として「カラフル」は第 3 回を数えている。

「カラフル 3」は、「カラフル 2」に引き続き、愛知県長久手町にある、長久手町文化の家「風のホール」「森のホール」をメイン会場とし、全国各地から集まった全 16 団体が 3 日間にわたり、各団体持ち時間 1 時間という枠の中で、それぞれの作品を上演するという形態をとっている。

特に「カラフル 3」では、1st.Stage と 2nd.Stage の 2 段階構成がとられている。

全国公募の 1st.Stage(3 月 14 日、15 日武豊町民会館) で 14 団体が上演、このうち、観客投票と審査員選考によって、5 団体が 2nd.Stage に選出された。

2nd.Stage では、5 月 2 日から 4 日までの 3 日間、1st.Stage で選ばれた 5 団体に加え、全国地域からの推薦された 6 団体、主催者推薦 5 団体の計 16 団体の上演が行なわれた。2nd.Stage の会場となる 2 つのホールでは、「風のホール」で 8 団体、「森のホール」で 8 団体と、毎日出場団体全てが上演を行なうスケジュールが組まれている。

上演スケジュールが 3 日間毎日異なるため、観客は、2 ホールを自由に行き来できる 1 日通し券か、A から F までの指定のあるブロック券の購入により、希望の団体の上演を自由に観劇できる。

カラフル 3 では、各賞が設けられ、順次発表された。(パブリックアワードー観客賞ー、インターネットクチコミ賞ー演劇ライフ賞ー、三重県文化会館賞、シバイエンジン賞、ハイスクールミーティング賞、ぽんプラザホール賞、コンカリーニヨ賞、Asect 賞)

■特徴、意義

短期間・集中的～3 日間で 16 作品観劇可能～

カラフルの特徴として、3 日間で 16 団体の作品をみることが可能であるということがまず挙げられる。

数週間にわたって、1、2 作品が日替わりで上演されていくスタイルの場合、その全てを観劇しようとすると、その開催地以外の、他都市から足を運ぶ観客は、長期の滞在が必要となり、交通費・宿泊費が負担となる。短期間のうちに集中的に多くの作品を観ることができるということは、旅費の観点からみても、メリットが大きい。

また、カラフルでは、1 時間という上演時間の制限がもうけられている。これにより、1 日最大 8 本の観劇が可能なスケジュールが組まれている。観客は、これを全て見てもよいし、希望の団体だけを見てもよい。1 時間なので、通常の、2 時間前後ある芝居を見に行く

よりも気軽であり、最初に時間が明確に示されていることで、観劇前後の、他の個人的なスケジュールの組み立ても見えるので、足が運びやすい。

ある一時期の、ここだけで見ることができるという、お祭り感を与えるものとしても機能している。

「カラフル3」の感想をひろってみると、他地域から見たメリットとして、特に短期間に、多くの作品を観ることができるという点についての意見が多い。

* * * * *

・一箇所で全国の若手劇団の美味しいところを観れたのは非常にお得(金沢市民芸術村 金山 古都美)

・一定期間にわたり、1週間ごとに作品が1本ずつ上演されるようなスタイルの場合、その地域“以外”的な人間にとっては、観られる本数がごく限られることがツライ。(三重県文化会館 別所慶子)

・60分作品×一日8本というスケジュールで、がんばれば2日間で全作品観られるという効率の良さは本当にありがたい。(三重県文化会館 別所慶子)

・“たった3日”で“1日16団体”という濃密過ぎる程の設定が、独特の高揚感を生んだのだと思う。(大野城 まどかぴあ 中原めぐみ)

・2日間の滞在で、10本を超える国内諸地域の芝居が観られるという機会は、カラフル以外にないか、きわめて限られている。(NPO法人FPAP 高崎大志)

祭り、見本市——誰でも参加しやすい環境、演劇の触れやすさ

短期間に集中的に、多くの作品をみることができるという点は、「参加のし易さ」ということにもつながるといえる。“祭り”にたとえてカラフルを捉えようとする見方も多い。

参加のし易さ、演劇の触れやすさという環境がどのように作り出されているか、この部分が一見して分かるものではないくらい多重的に、様々な要素が組み込まれていることが伺える。

短期的、集中的ということも、やはりこの要素に含まれている。演劇博覧会と謳っているように、自由に出入りが可能であり、好きなもの(劇団、作品)に立ち寄ることができる環境が用意されていることで、観客は安心して、演劇空間に入り込むことができる。

* * * * *

・私が以前、音楽の野外フェスで「音楽そのものに祝福されている！」と感じたときと同じような「演劇そのものに祝福されている！」感が今日の会場にはあった。みんなここにいること、この時間にいることを楽しんでいた。演劇は人を幸せにできると思った。(劇団うりんこ 平松 隆之)

・一本終わるたびに、物販コーナーは威勢のいい呼び込みで盛り上がり、ロビーでは、あの劇団が面白かった、この劇団が良かったという感想があちこちで飛び交い、劇場関係者や劇団の間では名紙が飛び交い、まさにお祭り騒ぎ(三重県文化会館 別所慶子)

・演劇祭というだけのハレの空気も感じられたし、演劇見本市にふさわしいものもあってこの波に乗れないかと考えた(NPO法人FPAP 高崎大志)

・あんなにもボリュームの大きい“演劇漬け”ともいえる企画にあって、演劇が観る側に対して、「演劇に自由

に触れて、楽しんで」という自由さを演出し、且つ保障したからこそではないかと思う。実際、観客は、とても自由に作品を楽しむことができる作りになっていて、全16作品を見てもいいし、何作品かだけ見てもいい。

3日に分けて見てもいいし、2日で一気に見てもいい。言うまでもなく、1本1時間という設定も、ある客層に対しては作品に触れるためのハードルを確実に下げていたと思う。(大野城まどかぴあ 中原めぐみ)

・散発的な公演の演劇祭はどうしても、疎な感じがあるが、対バン形式の連続上演の演劇祭は、ホントに祭りだし、見本市だ。(NPO法人FPAP 高崎大志)

育成、ネットワーク効果

東京や大阪を中心とした都市圏に対し、地域で「カラフル」のような全国各地の若手の地域演劇を一堂に集める企画が開催されることは、1つのモデルケースとして、それぞれの参加団体はもちろん、観客側への刺激を与える場としても大きな役割を担っているといえる。また、それぞれの地域で活動する若手演劇人にとって、地域を超えて作品を上演することは、他地域への意識とともに、自らの活動する地域への意識にもつながる機会を与えるだろう。普段なかなか見えづらい他地域の、同じように活動する表現者、作品に出会うことにより、刺激や励ましを受ける場であり、どの地域にどんな表現者がいるのかという顔の見えるしくみができる。どの地域にどんな表現者がいるのかを知ることだけでも、自分たちの活動の拠点としての場や表現の方向性への意識は違ってくるだろう。また、「カラフル」によって集まった表現者同士の情報交流の場にもなりうるし、「カラフル」を見て招聘する劇団を検討する各公共ホールや劇場関係者同士の情報交換、地元劇団とのネットワークを広げる場にもなりうる。

「カラフル3」ではまた、次世代の表現者への育成も狙われている。高校生を取り込んだ各種の仕組みがこれにあたる。

今いる観客、客層を捕まえるだけでなく、次の表現者や観客にまで視野が広げられている。

「カラフル」を継続させていく意味でも、「カラフル」とともに育っていく層とは別にまた次の若い世代を巻き込んでいくことが求められる。

「カラフル」が演劇に触れやすい場を提供していること、ある一定のクオリティを持ち、一地域だけではない多くの地域の様々な表現に出会える場であることは、次世代の表現者の育成に大きな効果を与えることが期待できる。

* * * * *

・意義の大きい企画だっただけに、地域で開催する演劇企画としてとか、参加団体から見て、観客から見てなど色々な側面があると思うけれど、個人としてまず一番に思うのは、演劇が観客に愛されて存在している空間だったということ。(大野城まどかぴあ 中原めぐみ)

・カラフル3では、高校演劇との連携をしていて、高校生のお客さんが多かった。正式に確認していないけど、公演が終わった後の団体が高校生から取材受けるみたいなこともやっていて、地域演劇と高校演劇との表現手法の情報交流みたいなのがあったことが、すっごくすばらしいと思った。(NPO法人FPAP 高崎大志)

多彩性、多様性 “カラフル”

多様性、多彩性はカラフルの核になっていくもの、大きなキーワードの一つと考えられる。演劇という枠組みだけでは捉えられない幅があること、今後広がりをもっていく可能性も感じさせられることを多くの人が感じているといえる。

全体像だけでなく、個々の参加劇団の表現方法、パフォーマンスに挑戦できる、良い意味で自由な雰囲気がある。「演劇博覧会」と謳っているように、カラフルはそれぞれの劇団の個性が尊重される雰囲気が充分にあり、観客側もその雰囲気を楽しむ場が守られている。

「カラフル」企画自体、多彩性、多様性を視覚的にも感じさせる工夫が凝らしてある。特に、各上演前に流されるジングルは、「カラフル」にいかに多くの、様々な方向性を持った団体が参加しているかを感じさせる。まためまぐるしく展開される各団体のロゴも面白く、これから始まる団体の作品を期待させる。

1日最大8本の観劇をする場合、このジングルも1日8回見ることになる。(作品を8本見ると8回見ることになる。)これが、不思議と飽きるものにはなっておらず、1作品、1作品をリセットして新たな気持ちで観劇の体勢を整えるものとして機能していたといえる。

また、2つの「風のホール」「森のホール」といった2つ会場が設けられていることも、違う空間の中での観劇体験として、体感的に多様性を感じさせる。

「カラフル」は、様々な地域の劇団の作品に触れることのできる場であり、その中でもまた演劇の様々な方向性を見せてくれる場でもあることを感じさせる。

* * * * *

- ・「カラフル」は、『演劇』をもちろん主軸に置きながら、音楽・映像といった要素と上手に付き合っている企画だ、という印象ももった(大野城まどかぴあ 中原めぐみ)
- ・先入観を持たせない、あるいは払拭するという意味で、「カラフル」な作品=様々な方向性を持つ作品 が一同に会していることは、非常に意義が大きいし、その根底には「演劇との幸福な出会いを作り出したい」というひたむきな願いを感じた。(大野城まどかぴあ 中原めぐみ)
- ・本来の公演スタイルではない方向性を選んだカンパニーもあるとは思うが、大半の団体は日頃の方向性を維持した公演になっているように思えた。いろんな方向性の芝居を見ることが出来た。方向性の種類の数で言えば、指令指定都市クラスの地域劇団の芝居を1年間見続けるよりも、多くの方向性の芝居をみることができるのでないか。(NPO法人FPAP 高崎大志)

■カラフル今後

「カラフル」の今後 ~育成・継続と課題~

地域の演劇にとって「カラフル」を継続させていくことは、大きな意義がある。地域の演劇の活性化はもちろん、地元の表現者、その作品の表現レベル、クオリティの向上にもつながる。これにより、地域の文化、芸術環境は豊かになる。

一極集中的でなく、様々な地域でこれらの環境が育まれれば、全国的な文化芸術環境の向上へつながっていくことが考えられる。

特に、育成という点でいえば、「カラフル」は、現在活動中の表現者だけでなく、大学生、高校生など、次の世代の育成をもが視野に入れられている。「カラフル」が継続されていくためには、やはりそれを支えていく層を引き継ぎながら育てていく必要がある。

それは、単にクオリティの高い作品を他地域から集めてくるだけでは効果がうすい。親しみやすさ、様々な表現の方向性、多彩性に触れる機会の提供、主体的に作品を選ぶことができ、参加しているという感覚を楽しむこと、これらが機能する「カラフル」のような企画が、今後、愛知だけでなく、様々な地方都市で開催されることが望ましい。

「カラフル」のような企画を開催するには、ハード環境が一つの課題になるだろう。

今回、行われた「カラフル3」の会場である愛知県長久手町文化の家には、一つの建物の中に、複数のホールが入っている。その他にも、展示室や音楽室、会議室などの多数の使用目的に合わせたスペースが設けられている。今回「カラフル3」2nd stageには、全部で16団体が参加しているが、これらの団体の受入れを補うだけの楽屋も多数設置されている等、ハードの環境が整っている。どれだけの団体を受け入れるかにもよるが、ハード面の整備が一つの課題になると思われる。それにも関係して、地元の劇団と他地域の劇団をどのようなバランスで取り込むかということも課題となっていくだろう。その地域が地元のどのような部分に力を注いでいきたいかということとも重なってくる。

「カラフル」は、表現者として参加する側にとっても、観客として参加する側にとっても外を向く機会を提供してくれるとともに、自らの地元を振り返り、見直し、そしてどのように地元の表現、文化環境を育てていきたいかを考えるきっかけを与えてくれる。そのような外部からの刺激や自身への問いかけは、また、様々な地域で、様々なやり方をもつた「カラフル」が生まれることにつながるだろう。

* * * * *

・カラフル3をみた高校演劇のレベルはあがるし、バリエーションも増えるだろう。

このままいってあと10年くらいしたら、愛知が高校演劇のレベルが最も高い県として認識されるようになるのではないか。(NPO法人FPAP 高崎大志)

・「演劇祭には育成効果が無いものが多いが、今地域に必要なのは育成。」といったが、カラフル3にはその狙いも明確に含まれている。(NPO法人FPAP 高崎大志)

・今回の会場はひとつの建物の中に、ホールが複数、会議室的な部屋多数。というハード環境。16団体受け入れとなると、楽屋を入れ替え制にするとしても、8団体分くらいの楽屋を確保しないとどうにもならない。

愛知だと300席×2くらいの組み合わせがいいかも知れないが、他の地域だともうちょっと客席数が少なくても良いかも知れない。(NPO法人FPAP 高崎大志)